

北大・イールズ闘争から白鳥事件まで

— 中野徹三氏に聞く (1) —

今 西 一

はじめに

中野徹三氏は、日本を代表するマルクス主義哲学者である。そのスターリン的な素朴「反映」論への批判や「生活過程」論は、歴史学にも大きな影響を与えた。日本思想史の安丸良夫氏は、友人の中世史家河音能平氏（故人）に勧められて読んだそうである。私は、学生時代、清水書院の『レーニン』（1970年）を読んで、同書のレーニンの古典とされていた『唯物論と経験批判論』への厳しい批判に驚いたことがある。次に出会ったのは、画家の永井潔氏との芸術認識論々争である（1977年）。その頃私は、美学に興味があって、ヘーゲルやベリンスキーを読んでいたが、中野氏は永井氏らの「反映」論に厳しい批判を投げかけられた。

そして、より大きな衝撃を受けたのは、藤井一行氏（富山大学名誉教授）らとの『スターリン問題研究序説』（大月書店、1977年）である。1980年前後、ユーロコミニズムの流れが日本でも紹介され、アルチュセールらの構造主義的マルクス主義などが読まれるなかで、マルクス主義のルネッサンスが叫ばれるようになった。なかでも名古屋大学の田口富久治氏らの政治学グループ（加藤哲郎氏、他）と、北海道の中野氏らのスターリン批判や「生活過程」論（『生活過程論の射程』窓社、1989年）などの影響は大きく、河西英通氏（現広島大学教授）ら若い歴史研究者にも、多大な影響を与えている。中野氏や藤井氏らが中心となったユニークな理論誌『窓』は残念ながら現在では、休業状態になっているが、おそらく今後、同誌の活動はメディア史のなかでも正当な評価を受け

るであろう。

なお『スターリン問題研究序説』の前後に刊行された『マルクス主義と人間の自由』（青木書店、1977年）と『マルクス主義の現代的探究』（青木書店、1979年）は、大学院時代からの中野氏のスターリン化された「マルクス主義」に対する徹底した原理論的な批判を代表するものであり、旧ユーゴの「プラクシス派」の哲学者をはじめ、国際的にも広く注目を集めた。その後も現代社会主義（運動）についても、批判的な研究を続けておられる、正に「闘う80代」である（『社会主義像の転回』三一書房、1995年、藤井氏らとの共著『拉致・国家・人権』大村書店、2003年、他）。

中野氏にはお聞きすることが多く、札幌での生い立ち、陸軍幼年学校時代と戦後の中学時代、のちのスターリン主義批判の原点となった「極左冒険主義」期の北大での学生党员としての運動と体験、スターリン主義哲学批判としての大学院時代、私立大学での「教職員自主管理」のひとつの典型となった「明和方式」の業務理事としての活動と、スターリン主義批判を全面展開した教員時代の仕事など、多種多様である。第1回は、生い立ちと学生運動、特にイールズ闘争と、1952年、「極左冒険主義」の悲劇となった、白鳥事件のことをお伺いすることにした。

中野氏には、札幌学院大学の元同僚の佐々木洋氏が仲介の労をとってくださり、聞き取りにも参加していただいた。第1回の聞き取りは、2010年10月8日、中野氏のお宅で行った。記録者として北大スラブ研究センターの井澗裕氏にも立ち会っていただき、テープ起こしなどを助けていただいた。お二人には、記して感謝したい。

1 敗戦と思想の転換

中野徹三氏は、1930年12月19日、北海道の旭川市で生まれた。父孝一氏は、旭川の第26連隊の青年将校で、母登茂子氏は、北海道帝国大学の事務官だった小川忠之助氏の長女だった。しかし、幼少の頃から札幌暮らしで、小学校は円

山第二小学校であった。ところがアジア・太平洋戦争が始まる年に第二小学校が廃校になり、札幌師範の付属小学校に転校した。その後、札幌市立中学校に入学するが、翌年、仙台の陸軍幼年学校に入学する。

幼年学校時代の思い出は、仙幼会の機関誌『山紫に水清き』（59号、2004年）に、「私の半世紀」として書かれている。幼年学校の同期生には、後に人権派弁護士として活躍する遠藤誠氏（故人）や、二年先輩の三年生には哲学者の芝田進午氏や、作家のなだ・いなだ氏などがいたが、芝田氏とは当時は直接交渉はなかった。「私の半世紀」は、「59年前の1945年のたしか8月28日か29日、私たち仙幼生の北海道組は、あの校門に続く坂を降りて、三々五々、帰郷の途に着いた」という文章からはじまる。本州の学生は1週間ほど早く帰郷できたが、北海道組は、「連絡船などが殆ど沈められていたため」、帰郷が遅くなったそうである。

入学して5カ月で学校が消滅し、敗戦と帝国陸海軍の解散、米軍の日本占領によって、夢にまで見た帰郷が実現するのだが、「『自分』が、どこか不条理と罪を負った『抜け殻』の行動のように思われ続けた」そうである。しかしこれが、「万乗の君の『股肱』と自覚していた常識の中での、絶対の信念体系と自己の存在との一体化から、裸の『自我』が滑り落ちはじめた最初の瞬間」でもあった。友とは「それぞれの道を通じての対米英復讐戦」を誓い合ったが、「本州組が帰ってしまい、訓練と上級生の制裁も消えてしまったあの一週間ほど、私にとって『自由』だった時間はなかった」と回想している。広瀬川で水遊びをし、頭上にグラマンやコルセアが乱舞するその下で、「私たちは、屈辱感とあわせて、一種絶望的な解放感をも、ひそかに味わっていた。—『ともあれ、生きていたのだ、生きるのだ。』」といった生への充足感が生まれてきたという。

しかし、復員して札幌市立中学校2年に戻ったが、「父は終戦当時北支におり、翌年春帰国するまで消息不明、収入源が切れた中で一家7人が何とか生きてゆくために」、北大生の兄と中野氏は、「家具とジャガイモを交換するタケノコ生活」が続き、山羊の飼育まで始めている。「終戦の冬は大雪で、餓えた身には除雪は重かった」そうである。しかも、「栄養失調」になり、「小学校のクラス

会で皆と鯨を食べると、握力がすぐ回復してびっくりした」そうである。

中学に戻って2カ月ぐらいは、宮城遙拝や軍人勅諭の奉読を続けていたそうだが、すでに共産党員だった兄から、「唯物史観にもとづきこの戦争と日本社会の本質について」巧みに説得されたが、最初は「必死の抵抗を試み」ていた。しかし、「抵抗できる理論も思想も何もな」く、また新聞やラジオで次々に明るみにでる「戦争の真実」は、一日ごとに「私の既に破れだしていた信念の根元を掘り崩していった」。

「ある朝私は、『俺はだまされていたのだ!』と強く感じた。そして軍人勅諭と、解散時に私たちに配られた天皇の軍服の切れ端とを、ストーブの火に投げ込んだ。それと同時に、指導生徒の山崎光さんや寝室の友人たちから来ていたハガキや別れた時に作った住所録も、いっしょに火にくべてしまった—それは、『こうした偽りの過去から自分を断つため』、だった。」

後で後悔もしたそうだが、これは中野氏が生まれ変わるために必要な儀式だったとも言える。この頃から中野氏は、マルクスや社会主義の本に強い興味をもったそうである。そして、中学校では上級生に対する敬礼強制の習慣が残っていたが、中野氏は全学の学級委員の総会で、同じ二年の委員と共にこの敬礼強制の廃止を主張し、大勢を占めた。だが、教頭がカンカンに怒って、この決議を抑えてしまった。ところが進駐軍の指令で、この軍隊式敬礼の廃止が出されると、あっけなく廃止された。また4年生の時には、級友に暴力をふるった担任に対しても、これに抗議して暴力をふるわない約束を取り付けるなど、「中学民主化」運動も起こしている。

1948年春、旧制の北大予科に進学するが、中学の時は数学や物理が好きで、湯川秀樹博士のノーベル賞に刺激され、理論物理学を目指して理類に入学した。ところが2カ月後には共産党に入党したため、「以後理類の勉強はまともにせず、自発的な研究といえばマルクス主義の哲学や経済学、歴史と文芸理論ばかりで、あとは党活動とアルバイトという毎日」であった。旧制予科は入学して1年で廃止され、新制大学の第1回生に編入された。その時、中野氏は理類か

ら文類に代わった。新制大学2年の年、中野氏はイールズ闘争に直面する。

2 イールズ闘争の歴史的意味

昨年は、イールズ闘争60周年ということもあって、北大では5月16日に、「北大の自由・自治・反戦・平和の歴史を考える」という、イールズ闘争60周年、60年安保闘争50周年の記念集会がもたれた。イールズ闘争とは、連合国軍総司令部（GHQ）の民間情報教育局（CIE）の高等教育顧問という肩書きで、W・C・イールズ博士が、「赤色教授追放」の演説を全国の国立大学で行っていた。北大では1950年5月15・16日にイールズ博士の講演会が行われた。初日の講演会では、教官層の質問にもまともに答えられず、2日目は、学生代表の実行委員数名が質問を要求して演壇に迫ったので、司会者の判断で講演会は中止された。このように何の暴力事件も起こっていないのに、GHQは面目を失ったとして、事件の責任者の処分を日本政府と北大当局に迫った。その結果、闘争の1カ月後に、4名の退学者を含む10名の学生が処分された。

当時、官公庁やマスコミ・報道機関などでは、レッド・パージの嵐が吹き荒れており、北大でも「ポツダム政令62号」によって、「北大法学部杉之原，農学部矢島，理学部松浦，触媒堀内，数学森谷ら教授数名が追放対象になっていた」（『北海道・進歩と革新の運動史年表』ほっかい新報社史料刊行委員会，1984年，54頁）。1950年10月，文部省は1千名にのぼる国立大学教員の追放リストを作製して政令62号の審査委員会にかける準備を進めていたといわれるが，イールズ講演に対する各大学の闘争と，とりわけ9，10月の全学連に結集した全国の学生の闘争は，ポ政令62号による「レッド・パージ」の強行を遂に不可能にしたのであった。しかし，教官の追放は防げたが，学生の犠牲者は出してしまった。

これに対して中野氏は，北大のイールズ闘争は，大学のレッド・パージ反対闘争で大きな役割は果たしたが，50年の日本共産党の分裂で，全学連中央が国際派であったのに対して，北海道学連は所感派の指導を受けていて，中央を「分

派」と見なして、全国的な闘争と結合できなかつた、という誤りがあったのではないか、と反省する（「イールズ闘争—その思い出と、今考えること」『蒼空に梢つらねて』柏艚舎、2011年）。私もまた、処分を受けた学生たちの一部は、共産党の指導で地下活動に入っており、その後の反レッド・パージ闘争、処分反対闘争が十分にできなかつたことには、共産党の50年分裂が大きかつたという指摘は正しいと考える。

また、この指摘を一つの契機に、イールズ闘争と大学・教育界のレッド・パージ反対運動を、各大学・地域で個別的に描く段階から、その全体を当時の全情勢のもとで、総合的・相関的にとらえ、分析し、その功罪を明らかにする段階に進むことが、今求められていると思われる。

3 白鳥事件

50年代初頭の共産党の「極左冒険主義」が、どのような悲劇を生んだのかは、白鳥事件にもよく現れている。これも中野氏の「現代史への一証言」（『労働運動研究』第356・357号、1999年）によって見ておこう。

白鳥事件とは、1952年1月21日夜、当時札幌市警警備課長だった白鳥一雄警部が、自転車で帰宅途中に、やはり自転車に乗っていた男に、背後から拳銃で射殺された事件である。松本清張の『日本の黒い霧』（文藝春秋、1973年）などでも取り上げられ、怪事件として注目を集めたが、今ではかなり年上の世代にも忘れられた事件とも言える。

しかし、中野氏も言うように、51年から52年にかけては、日本共産党は、半非合法状態にあり、51年綱領によって、武力闘争＝暴力革命路線をとった時期である。北海道でも51年12月に、「赤ランプ事件」と言って、列車を止めて石炭を奪おうとする事件が起きている。年末には札幌市役所に「自由労働者」の一団が、「餅代よこせ」と座りこんでいる。これに対して札幌市警は厳しい弾圧をもって臨み、多数の共産党員を逮捕した。そこで高田市長、白鳥警部、塩谷検事などに、数百通の「脅迫葉書」が舞い込み、これもまた「脅迫葉書」事

件として逮捕者がでた。北大の太田嘉四男講師なども「脅迫葉書」の容疑で逮捕され、休職している（前掲書）。そして翌52年の正月に、「新年にあたり警察官諸君に宣言する」というビラが、主要な警察官の職場や家庭に送られた。この「宣言」には、「白鳥其の他の敵、新しい敵を一人一人葬り去ることを宣言する」と書かれていた。

こうした事件の背景のなかで起こった白鳥市警課長の射殺事件は、全国を震撼させた。しかも事件の翌々朝には、「見よ天誅遂に下る！」という所謂『天誅ビラ』が、北大正面前をはじめ札幌市内の数カ所に撒かれ、その中には「自由の凶敵白鳥市警課長の醜い末路こそ全ファシスト官憲共の落ゆく運命である」という見出しで、白鳥市警課長の殺害を正当化している。そのビラの末尾には「日本共産党札幌委員会」の名前が、大きく署名されていたのである。

当然警察は、事件の背後に共産党とそのシンパ（同調者）がいると見て、その追及は「ニコヨン」（自由労働者）、北海道大学の学生党組織、共産党の札幌市委員会と、居住・経営細胞に集中した。一部には高校生の日本民主青年団員（のちの日本民主青年同盟員）にも及んだ。

中野氏は、「その結果は、悲惨であった。私はまだ正確には確認できないが、直接間接に事件に関係ありとみなされたおよそ50数名の党員あるいはシンパサイザーが逮捕され、逮捕を免れた者のうち、10名が中国に亡命した。「逮捕者のなかから、複数者（追平著書によれば朝鮮人1名を含む3名、そのひとは高校生）が自殺または変死を遂げ、他に少なくともひとり（北大生）は、精神異常を来して入院した」と語っている。この逮捕がいかに杜撰であったかは、全学連の委員長で京大生の玉井仁氏が、別人と間違われて逮捕され、拘留理由開示公判にかけられていることにも示されている。

首謀者と目された村上国治氏は、52年10月に捕らえられ、一貫して無罪を訴えてきたが、63年10月、最高裁で懲役20年の刑が確定されて、77年に刑期満了で出獄した。その後何度も再審請求したが、94年11月、埼玉県の自宅で焼死する、という非業な最後を遂げている。中国に亡命した10名のうち、7名は日中国交回復後に帰国したが、白鳥事件の実行犯とされた佐藤博容疑者と宍戸均容

疑者は中国で客死し、北大生で唯一中国に残留している鶴田倫也容疑者は、いまだに堅く口を閉ざしている。

白鳥事件には直接係わっていなかったが、当時の軍事部門の関係者であった川口孝夫氏（故人）は、56年3月に密出国して、18年間の亡命生活を送って、73年12月に中国から帰国している。彼は、『流されて蜀の国へ』（1998年）という自費出版した本を出している。55年の11月に日本共産党の統制委員の梶田茂穂氏から川口氏は呼び出され、北大生高安知彦氏などの検事調書等、膨大な白鳥事件の資料を三日間で読まされ、「高安君らの供述内容は、私が『関係者』から聞いていた事実と基本的に一致する」と答えたために、「知りすぎた男」として偽りの理由で、中国へ送られたのである。

また追平雍嘉の『白鳥事件』（日本週報社、1959年）は、転向者の書として、偽書扱いされてきたが、渡辺富哉氏の努力によって、「追平雍嘉上申書」が発見されている。本インタビューでも、中野氏は当初は犯行を認めるメモを出しながら、数日後には、それを否定するメモを共産党が出した、という貴重な発言をしている。これも60年後に初めて語られる真実である。

中野徹三氏へのインタビュー(1)

今西「最近は、ハンガリー事件の頃の聞き取りも始めています」

中野「ほう、ハンガリー事件の、ですか」

今西「ハンガリー事件で共産党を除名になった人と、ハンガリー事件の時に国際学連の副委員長をやっていた田中雄三さんという（人から）、ハンガリー事件当時の国際学連の内部分裂などを、それはまだ聞いてないですけどね、京都に行って聞く予定なんです。50年代のリンチ事件から反スターリン問題まで色んなことを全部やっています。それから日本近代史研究会、あの服部之総さんがやっていた、そのグループを中心に、東京の活動をですね調べたりもしています。…できるだけ今50年代を中心とした社会運動の記録を残しておかないと…。ちょっと時間との競争になっています。武井昭夫さんもこの前お亡くなり

になりましたし」

中野「そういう時期なんでしょうね。だんだんその頃の人がいなくなるから…私が会員になっている『労働運動研究』誌などでも、当時の関係者の回顧談が次々に出っていますが、由井格氏が提供した『水野資料』や渡部富哉氏が踏み切った秘蔵資料の公開などが今伝えられています」

今西「労働運動研究所の柴山健太郎さんは別の人、私の後輩がついて今ずっと聞き取りをやっています。鹿島の方へも行って、鹿島の調査もやっているんですけどね。大変柴山さんにもお世話になっています」

中野「僕は北大の学生運動、学部の最後の一、二年は…三年生か四年生くらいのところは、かなり、全体はともかく、ある程度の所は見えるような位置で仕事をしていたのですけれど、その前はよくわからない。だいたいね、50年の後半あたりからは共産党の組織がもう、表と裏に別れていて、裏の方はいろんな所から直接間接に聞いたり一部体験したりしていた程度の時期なので、全体像は当然、なかなかわからない。したがって当時の運動といっても、自分が直接体験した範囲から見た状況しか正確には語れませんので、その点はよろしくご了解下さい」

1 生い立ち

今西「それはもう、むずかしいですよ。それでは、順番にお聞きしていったほうがいいですか。(お生まれは) 1930年12月の何日になりますか？」

中野「19日ですね」

今西「旭川でお生まれになった。お父様は軍人だったのですね？」

中野「ええ、旭川の第26連隊の青年将校で、私は男の子の三番目で旭川生まれ、姉を含めると四番目です。私の妹(中国文学者で『西遊記』などの研究者である中野美代子)は札幌で生まれました」

今西「お父様のお名前は何とおっしゃいます？」

中野「父は孝一という名です」

今西「お生まれは(どちらです)？」

中野「岩手県の野田という海岸の村、あのリアス式海岸の、山陸海岸国立公園の景色のいいところでね、私の曾爺さんのあたりまでは網元で漁師だったそうです。私の祖父は村の助役をやっていたという、そういうところですよ。もともとは武家の末端で、追われてあの辺まで来て…なんていう話を聞いたことがあります。阿部一族の従臣だったとか。とにかく、当時の支配権力とは疎外されていて、ああいうところで暮らしを立てていたようですね」

今西「お母様のお名前は何と言われますか？」

中野「えーと…母の名前は登茂子（ともこ）とあって、もともとは京都の方について、母親の父は小川忠之助とあって、北大（佐藤昌介総長の時代－在職 1918－30年）の事務官兼教授でした。」

今西「当時は農学校ですか？」

中野「いや農学校ではなく、もう大学になったころでした。何かの資料に出ていました。字がうまくてね、私は全然継いでないんですが。北大で書道とか漢文の先生もやっていたようです。事務官をやりながらね。親父が北海道へ来たのちに、誰かが媒酌してその長女をもらったのだということのようなんです。まあ、東男と京女という感じなんですよ、きっと」

今西「旭川師団ですと、2・26事件には参加していませんか？」

中野「あの、その推論に関して言うとね。私の父は明治26年に生まれて、私の先輩らしく仙台の幼年学校から、士官学校に入ってね、大正期に任官して間もなく、ロシア革命があって、シベリア出兵に若い将校の時に参加して、尼港事件の時にはニコライエフスクに行って、当時の古い写真なんかもありました。それは兄貴がなくしちゃって、今はさっぱり（笑）。…それで帰ってから間もなく、旭川の第26連隊に入って、そこで少佐まで行って、そのころ日本が満州国を作り上げましたが、その少し前に（宇垣）軍縮があって、一旦少佐で辞めたんですね、軍人を。立身出世はあまりうまくない方で、銃剣道が非常に強くてね。体格もいいし、暴れん坊だったんですが。で、一旦辞めて、退職金で札幌に出てきて、土地を買って家を建てたんです、私が三つの時ですが。それからしばらく日本にいて兎を飼ったりしていたけれど、生活も楽じゃないし、そ

れで満州の方では満軍が組織されていて、そちらの方に職があるということですね。それが確か昭和10（1935）年ころだと思いました」

今西「では、ちょうど（1936年の）2・26事件ははずれているわけですね」

中野「そう、2・26事件にはかかわらなかったわけで。…それで満軍の将校になったわけです。向こうに行くと2階級上になるのですが、上校（大佐）になって、満軍の軍官学校、向うの士官学校の校長などもやって、満州を転々としてあちこち…最後に、戦争が終わる三年ほど前に満軍を辞めて、北支の方、北京の近くで鉄道を守る、軍隊ではないですが鉄道の保安部隊のようなものに勤めたんです。」

佐々木「それは単身赴任？」

中野「それはもちろん。暫くしてから、うちの母親も行きました。行って間もなく病気に…、満人から買ったアジウリを食べて腸チフスになったそうです。半年くらい寝ていて、それから亡くなりました」

今西「それで、先生はずっと、こちらにおられたんですか？」

中野「母は姉と妹と、つまり女の子だけ連れて行きました。親父が恋しくて追いかけて向うへ行って。それで葬式を済ませて姉と妹を連れて帰ってきて、父はしばらくして日本で再婚して満州に戻りました。我々子供たちは爺さん婆さんと一緒に住んでいたのですが、戦争が終わって翌年、父が北支から帰ってきました」

今西「じゃあ、物心つくころは札幌の生活ですか？」

中野「そう。その頃は、札幌市外円山町でね。西20丁目までは札幌市で、このあたりには私の家の西から円山までは家がなくて、一面の荒野でした。大きな樹があちこちに残っていて、春先には雪解けの水で家の前まで水びたしになるというような。子供のころは円山公園が遊び場でしたけどね」

今西「小学校はどちらの小学校に行かれたのですか？」

中野「もともとは円山第一小学校というのがあって、それが今の円山小学校となって大通西25丁目にあります。だんだん人口が増えてくるので、円山第二小学校が今の啓明中学校のあたりにできました」

佐々木「あの、西友のところにある？南9条の」

中野「そうです。私はその、第二小学校に入りました」

今西「小学校の教育はどうでした？かなり軍国調で？」

中野「まだそれほどではないけど、まあ、そういう時代ですよ。私が小学校の一年生に入った年（1937年）に日支事変がはじまるわけですから…。ひたすら軍国主義化していく時代であることは間違いなし、我々も戦争ごっこばかりしていた時代でした」

今西「もう鬼畜米英とか…」

中野「鬼畜米英はまだ…太平洋戦争が始まってませんから」

今西「当時は中国ですか、やっぱり」

中野「チャンコロをやっつけろという感じでね。…まあ、小学校のころは私は割とおとなしく勉強をしていて、という方だったけど。親爺が軍人だったからやはり軍人志望でした」

今西「それはご自分で決められたのですか？」

中野「まあ雰囲気もそうだったし、兄貴たち二人が軍人にならなかったものだから、父も僕に希望を託したんですね（笑）。時代も時代だし」

今西「それで、仙台の幼年学校へ行かれるのですね？」

2 小学校時代

中野「ええ。小学校5年の時に太平洋戦争がはじまって、そのときは、転校したというよりも、第二小学校が廃校になったんですよ。できて新しいんだけど。（当時は）札幌市立の中学校がなかったんで、市立中学校をつくるということで、円山第二小学校はその犠牲になって、なくなってしまったわけです。友達や先生は近い小学校に移ったんですが、私はどういういわけか、自分で希望したわけではありませんが、札幌師範の付属小学校、いまは二条小学校がある場所ですが、その5年生に編入になりました。

（ところが）私は非常にその小学校が気に入らなくてね、いわゆるお坊っちゃん学校で、附属というのはそうなのかもしれないけど。担任の先生はあからさ

まに依怙鬣屑をするしね、のちの北大の杉野目学長の子供とか、医者の子供とかが多く、また転校生をいじめる嫌な雰囲気があって」

今西「転校生はいじめられますからね（笑）」

中野「相撲は強かったんで、入って間もなくの体操の時間に、片っ端から投げやって、見直されましたが。でも先生も気に入らないから勉強もしなくなっで、それまでの円山第二小学校では級長をしていたのですが、勉強もしなくなっで、ある日足がしびれるような感じがしたのをいい機会に学校もサボって、担任にもよく思われなかったんでしょうけど。その時代の中学校を受けてみごとに落第しました」

今西「そうなんですか」

中野「学力試験もないんで、だいたい地域割りでね。かつての母校の円山第二小学校が変わった、市立中学校を受けたんですが。…やはり内申書が悪かったんでしょうね？」

今西「まあ『素行が悪い』とかね（笑）」

中野「それで附属小学校の高等科の一年に入りましたが、その頃から絶対に幼年学校に入ってやると思って猛烈に勉強をはじめて、それで翌年もう一度札幌市立中学校を受けて二回目で合格しました。それはもう終戦の前年ですよ。」

3 仙台の陸軍幼年学校と敗戦の体験

今西「でも、すぐに幼年学校に行かれるんですよね？」

中野「そして中学一年の秋に、仙台陸軍幼年学校の入学試験があって、翌年春に合格通知が来て、仙台に行ったわけです。敗戦の年の四月のことです。考えてみると、もう敗戦直前の惨憺たる時期なんだけど」

今西「学校は当時、予科練に行けとか幼年学校へ行けと薦めるんですか？」

中野「それはもう、軍の学校を志望するよにとね。中学校の校長は（生徒たちを）体育館に集めて、『お前たちは戦場へ行って死ね！』と怒号していました。でも、幼年学校はある程度学力がないとね」

今西「ええ、幼年学校はエリート校ですからね」

中野「それで僕らの学校からは、3人が入った…4人だったかな？…それで、仙台へ行きまして、初めて海を渡って…」

今西「お父さんも幼年学校なんですか？仙台の」

中野「そうなんです」

今西「でも勉強はできたんですか？その頃はもう動員とか、勤労奉仕とか、結構みんな大変だったそうですが」

中野「1年生は割とね、あんまりなかったんですよ。ちょっと近所に行くくらいでね。2年以上になるとかなり長期の勤労奉仕、ほとんど援農でした。僕は1年生の終わりに幼年学校に行ったんですが、あとの友達は旭川の近くの農村での援農に行っていて、私が(札幌に)帰ってきた時にはいないわけですよ。10月位まで一人で自宅で待ってましてね。ところで最後の半年たらずの軍隊生活というものを体験したわけですが、仙幼最後の49期の友人には色々面白い人がいましてね、左翼になった人も多かったんです。仙幼には同窓会認があって、若い各期が交替で発行するのですが、49期が当番の時その仕事を担当した島貫隆光君、横山達君、飯尾博君たちもそうでした。その友人たちに半生記などを書かされたりしたんですが、それはお送りしましたよね？」

今西「ええ。それで、弁護士をされた、東大に行かれた遠藤誠さんとはこの時期に？」

中野「そうですね。亡くなる少し前までは東京に出た時には、一緒に飲んだりしてね。名物弁護士としてユニークな男でしたが…残念ですね」

今西「山口組から帝銀事件までの弁護をされて、マルクス主義者になったり、仏教徒になったりというユニークな人でした。ヤクザから最後はオウム真理教まで弁護を依頼されたのですね。さすがにオウムは断ったようですが(笑)」

中野「ともかく、半年の軍隊生活というのは貴重でね、いろんな意味であとでもう二度と出来ない体験でした。非合理性とか、建前と本音の二重人格化を子供のころから強いるような、その生活。自分の体験を通じて、こういうもんだというのが、だんだんわかりましたが」

今西「どういうところに一番、軍隊生活の非合理を感じられました？ 体罰と

かありましたか？」

中野「それはもう、毎日ですね。でも、主にそれをやるのは1, 2年生の所に指導生徒という3年生の選ばれた…エリートなのかなあ。その指導生徒が、各寝室に一人、ついていましてね。その指導生徒が消灯後に我々を呼び出して『歯を食いしばれ』といって拳で頬を殴りつけるということが日常でしたね。直接の暴力は指導生徒からですね。なかには絶対にしない人もいて、いろいろでしたけどね。1年生は食事の時に、ご飯とか味噌汁などを分けて盛るなど給仕の仕事をするわけですが、上級生殿が食べてから、初めて自分たちも食べられるという。また上級生がお代わりを断ったら、下級生はお代わりができない。僕は上級生が断ったあと、それに気付かないで自分で味噌汁のお代わりをして、それが消灯後に『貴様は品性下劣だ!』と、指導生徒に殴られました。同じ食事の三年生の誰かが、僕の指導生徒に告げたのでしょうか。変だと思っても反抗できない」

今西「やはり自分の中で、反抗精神はその頃から持つようになりませんか？」

中野「持つようになりましてね」

今西「不正義に対してゆるせないというような気持ちとか」

中野「自分たちは皇国に殉じるというような精神が価値のすべてで。そういう意味では1・2年生はまだ純朴でしたが、3年生になれば軍隊生活の要領を覚えてしまって、規則ばかりの階層的な社会にあって、適当にうまく切り抜ける方法を見つけていく人も多く出てくるものだ、と感じました。だからね、終戦の天皇の詔勅を我々は正装帯剣して聞いたわけですけど、その晩は私の寝室の指導生徒が、軍人勅諭を口にして口惜し涙を流していたわけですが、2, 3日するとケロツとして、さあこれから故郷に帰るんだとニコニコしていた。何と言うか、きわめてあっけらかんとしている。我々はもう悲憤慷慨してね、どうやって米軍に抵抗闘争をしようか、たとえば教師になってそういうことをしっかり教え込む必要があるなどと、議論したりしている時にね、結構他人のいい飯盒だとか、いい服だとかを持って帰る人も出てくる。ああいう世界でもいいものを盗んでいくということがあるんだということがわかってね。不自然な精

神主義の世界では、反面では物質主義とか物欲というものがかえって突出してくる。ああいう学校ですらそうなんだから、本当の軍隊ではどんなものかは推測がつくわけですよ。そういう矛盾というか、建前と本音というか、建前には合わせるが、でも本音は別のところにエゴがある——そんなところに意外なところで突きあたったり。後の左翼運動でも同じですが、虚飾とか虚偽の、建前では『酬いられることを期待しない献身』などといって、でも実際は全く別とか、正反対など。そういうことに対する義憤というか、1年生の同僚たちにも、結構そういうことを意識している友人たちがおりました」

今西「やっぱり、学校時代よりも敗戦後の行動の方が、聖戦とか軍国主義教育への疑問というのが強く出た…」

中野「まあ、ほころびが見えたというかね、そういう感じがしましたね。下士官たちは毎日酒を飲んでね、下士官の中でも優秀な人が入っているわけですが、まあ全員じゃないでしょうけど、我々の部屋に酒の臭いをプンプンさせて入ってきたりね。日本の軍隊には、近代的な兵器は十分なかったけど、被服はたくさんあったわけで、それらを色々と闇に流したりしたんでしょうけど、そんな感じのことで、後で思い当たることが色々ありました」

今西「やっぱり価値観の崩壊ですよ、そういう」

中野「そうです」

今西「でも、すぐには北海道に帰れないわけですよ？ 船が出なくて少し待たされた」

中野「そうなんです。だから本州の同僚たちを、我々北海道組は校門で見送ったんです」

今西「本州の人たちは帰りやすいですよ。歩いてでも帰れるわけですから（笑）」

中野「北海道組だけはだいたい1週間…27、8日くらいになって、北海道組も帰ってよろしいとなった。8月15日から27日頃に郷里に帰るまでの、その間というのは本当にね、今までは強制された規律の中に生きていたなかから解放されて、訓練もなければ何もないという…」

今西「自由な空気ですよね」

中野「本当の自由を、あんなに自由のすばらしさを感じたことはなかったですね」

今西「屈辱感と解放感の両方を一緒に味わったわけですよね」

中野「そうなんです。それと、絶望とか怒りとか、敗戦の屈辱とか。20日前後でしたか、頭の上をブンブンとアメリカの飛行機が、これ見よがしに飛んでいてね、我々が広瀬川に泳ぎに行った時ですが、あとで『絶望的な解放感』と表現しましたが。これまでの本工決戦での『必死観』から、ともかくも『生きていいのだ、生きるのだ』というこの解放感は、比類ないものでした。」

今西「それで、札幌市立中学校の2年に戻られたわけですか」

中野「そうです。2年生に戻ったわけですが、学校に行ってみても、まだ2年生も3年生も中学校に帰ってきてないんです。食糧難が迫っている、飢えが迫っているというのはみんな知っていたから、なるべく援農先に長くいた方がいいとわかっていたんですね。だから、10月になってから、やっと帰ってきたという連絡があって、学校へ行き、昔の学友と一緒に戦後の中学校生活が始まるわけですね」

今西「でも、お父さんが中国東北部から戻ってないわけで、全然収入もないわけでしょう」

中野「ええ」

今西「それで7人で生活しなくてはいけないわけでしょう？」

中野「妹の美代子は叔父のところに子供がいないので、早く養子に行っていて、実の兄妹だけど義理の関係になっていて、生活も別だったんですけど、その時はわが家の2階に住んでいて一緒にいたんです。長男も札幌の二中を出て、オヤジを追って満州に出ていたんですが、翌年の夏頃に帰ってきました。それで、いるのは二番目の兄貴が北大の理学部において、爺さん婆さんと姉と、妹と叔母が近くにいるという状況。叔父は北海道の営林署の署長を終わってからボルネオに軍属として行っていて、終戦の翌々年に帰ってきました。それで収入が何もないもんで、一つは売り食いですよね。農家にタンスを持って行って、

ジャガイモと取り替えるなど。最初はタンスとジャガイモ2俵だったけど、後では1俵になり…」

今西「インフレが進みますからね（笑）」

中野「それと中学生同士でも、物資の…闇取引のようなことも教室でやって、それで食べ物を手に入るとか」

今西「除雪のアルバイトもやっておられたとか」

中野「それはアルバイトじゃなくてね。終戦の年は雪が多くてね、昔の家は今みたいに密集していないから、大きな道路まで自分で道を空けなくてはいけません。それに屋根からどんどん雪が落ちるからそれを除けたりして、除雪も大変でした。そのほかに今でいうとアルバイトですが、中学生で真駒内の占領軍の施設の清掃だとか、夏休みには近くの木工場が円山市場の近くにあって、そこで働いて木屑や鋸屑をもらってきて燃料の足しにしたり。休みはそういうアルバイト。それと後は自分でね、多少とも収入のあるところを探していたんですが、そのうちに、小学校の時の友達が山羊を飼えばいいと薦めてくれて、仔を産むようになったら乳が出る、その頃は牛乳がなかったから山羊乳は高く売れたんです。それはいいと思って、その年の秋に仔山羊をもらってね。それが半年もすると発情して、種付けをして、お腹が大きくなる。そして春に生まれたら雄の仔はしばらく育ててから潰して、内臓なんかも食べましたよ、美味しかった。乳も1日に一升くらい出て、当時はわが家で一番いい現金収入になりました。兄貴も色々なバイトをやってましたけど、彼は友人と怪しげな石鹼をつくってね、何かの油で（笑）、それに香料がないので、そのために歯磨き粉をブチ込んだりしてごまかしてね（笑）。僕はそのような石鹼を売って歩いたりしていました。同じ家に二度目に行ったら、『あの石鹼はあとで変な粉が残る』といわれて困って、兄に歯磨き粉はやめてくれ、といたりして（笑）。まあ、そんな時代でした」

中野「幼年学校から帰って、中学校にもどってまだしばらくは軍国主義の少年の魂は抜けていないから、毎朝宮城遙拝をして、軍人勅諭の何箇条かを奉読していたのですが、そのうちに、北大理学部にいる兄貴の話すことが昔とは全然

違って来た。『この戦争は何で起きたのか』と言い出したりして。終戦後間もなく、兄貴は北大の何人かの友人たちと日本共産党に入党していたんですね。それは後で名刺が出てきてわかったんだけど。それで私も改心というか…」

今西「組織されたんですね？」

中野「私も最初はミリタリストの卵として必死に抵抗したんですが、反論できるなにもものもなくして（笑）。新聞やその他で出てくることもね、今までは全く嘘であったという…。日本の軍隊がやっていたことは侵略だった。ある朝突然、俺は騙されたんだ！とわかった。それで、今まで持っていた軍人勅諭とか幼年学校から頂戴していた天皇の軍服の切れ端とか、幼年学校の友人達から来ていた手紙やら指導生徒から来ていた葉書やらも全部、過去を断つという意味で、ある朝ストーブに入れて燃やしてしまいました」

今西「もったいないことを（笑）」

中野「いやあ、後で『しまった！』と、時間が経ってから思ったけど、その時は過去を断たなくちゃこれから生きられないと」

佐々木「それ、年を越す前ですか？」

中野「前ですね」

今西「まだ極東軍事裁判などは始まっていないですよ？」

中野「まだ始まってないですね。でももう新聞なんかではね、我々が戦争中に聞いていたこととは天と地ほど違うでしょう？もう帝国陸海軍は滅茶苦茶に壊滅していたし、恥ずべきこともたくさんしていたし。我々が教えられていたのとは全く違う。兄貴の言うことにもなるほどと思うわけですよ。この戦争は資本家たちや軍部がおこしたのだ、ということもね」

今西「その頃にマルクス主義関係の本を読まれたんですね？」

中野「ボツボツとね。まだ中学校2年くらいでしたからね、3年くらいになってからですね。ただ、2年生で（札幌の中学校に）戻ってみると、学校の大勢や先生たちは全く変わっていないように見える。天皇の写真や、教頭が白い手袋で奉持してきた宣戦の動語を収めた奉安殿も、何も変わっていない。生徒たちである自分たちが変わってくるとそれがわかるわけですよ。ところが校長は

前には『お前たちは戦場へ行って死ね!』と叫んでいたけれども、今度はね、『民主主義とは責任を伴うものであります』とかいう話をするわけですよ。では、あんたの責任はどうなんだという不信感で、啞然としました。しかも、その頃はまだ中学校でも上級生に敬礼をさせられるわけですよ、軍国主義の、軍の学校と同じように。それが帰ってきてからも続いていた。それに批判的だったのは、私たち2年生でね。ちょうどそのころ、級長選挙で僕がトップで選ばれたんですが、でも2番目の生徒が級長になった。それはおそらく、軍の学校から帰ってきた者が級長になってはいかんということで、それで半年ほど僕は副級長にされました」

中野「それで級長副級長など、学級代表を集めてね、それは占領軍から言われたんですが、まあ民主主義的な、生徒を集めて意見を聞く機会をつくることになった。そういう機会を我々は利用してね、まず敬礼廃止運動を始めました。尊敬する先輩に挨拶するのはいいけれど、強制的にそれをするのは、この時代におかしいと、上級生は同じ場にいるのですが、そういう場で僕は中心になって主張したのです。すると上級生は我々を殴るといい始めたり、教頭などは上級生に敬意を払わないのはおかしい、と我々をどなりつけたりしたのですが、占領軍から間もなく敬礼廃止の命令が出たらしく、我々の言うとおりになったんです。そういう敬礼廃止運動から色々な改革をはじめたわけですが、そういう中学校の民主化運動も、僕ら2年生が先頭に立ってはじめたんです。兄貴たちの影響もあって。その頃は全学連なんかはまだできてないけれど、古いままの学校で、軍国主義の教授の追放とか、いろいろな教育の改革を下から進める運動が新聞などに載るようになった時代でね。我々も学校を変えないとダメだということで…」

今西「48、49年の旧制中学校や高校での民主化運動の影響は大きいですよ。その後の学生運動の出発点になりますよね」

中野「そうなんです。ところどころで報道されていたけれど、中学校や女学校などでね、ささやかながらもさまざまな民主化の運動があって、それが伝えられたりしてね、我々もいろいろなことをやらなくてはいかんという、自分たち

だけでクラブをつくったり…」

今西「中学には何かクラブはあったんですか？」

中野「中学校にいろいろなクラブをつくることも、占領軍が薦めたんでしょね。好きなものをね」

今西「英会話から始まって」

中野「英会話なんかもあったんでしょうか。美術とか物理とかの研究会も。スポーツでは、やはり野球ですね。」

今西「社会科学研究会などは？」

中野「社会科学系の方はね…あまり社会科学系はなかったような気がしますね」

今西「文学も？」

中野「文学や美術も好きな者が集まってやるというのが始まり、兄の友人で私の中学の先生になった人がいて、その人の影響で『狂人会』という名のラジカルな会が生まれました。美術では宮前先生という面白い先生がいてね、そういう人の影響でそんなことをやったんですけどね。この先生はまだ戦争中に、学校の廊下に女性のヌード写真を張ったりしました。」

中野「そのうちに、うちの中学校にアメリカ兵がジープで乗り込んできて、砂場を掘りはじめたんです。練習銃を掘り出した。あとでわかったんですが、それは中学校の軍事教練の時に来ていた下士官が、密かに埋めさせたんですね。それを誰かが密告して、それがわかって。結構、何十挺もでてきた」

今西「もう、戦犯に関わりますから。そういう軍事関係のものは処分するよという指令が出ていますからね」

中野「それで校長が占領軍に捕まってしまうとね、軍事裁判ということになった。それで先生たちが困ってしまって、我々生徒たちに何とか校長を助けてくれと訴えたのです。校長はそれを知らなかったのだからと。それで我々も討論したのだけど、まあ困った校長だったけど、アメリカ軍の軍事裁判で有罪になるのは、ちょっと気の毒だということになりました（笑）」

今西「沖縄送りですからね、有罪だと。強制労働です」

中野「まあ（校長は沖縄へは）行かないで、結局はね、大したことなしで終わったんですが、校長は免職になった。我々も一応『きつい裁きにしないでくれ、我々もしっかり監視するから』と文書を作って占領軍に提出したりしてね。また4年生の時に柔道七段という私のクラスの担任の教諭が一人の級友に暴力を加えたんでね。それが赦せないと、放課後みんなを残して、その先生を呼んできて、みんなの前で陳謝させて、二度としないと誓ってくれということ認めさせた、ということもありました。そういう暴力追放のね、運動もしました」

中野「それとまたもう一つ、私が中学を卒業する前年に、またもや市立中学校を廃止して、今度は新制中学に変えるという（動きがありました）。新制中学は義務制になっちゃったから全然足りないわけです。それでまたもや、前の円山第二小学校から変わってできた、一番新しい札幌市立中学校を犠牲にして、その校舎を新制中学校に転換するという。そして先生や生徒は近くの（学校に）移すという案が、アメリカ軍のある程度の肝煎りででてきたんです。それでまた先生たちが我々にね、何とか阻止しなくちゃと言って協力を求めてきた。僕らもね、やっとできた市立中学をなくすのはおかしい。新制中学は別にちゃんと国で作るべきだと考えて、（その運動を）やろうということになり、取り上げたんですよ。それで僕らも、労働組合に支援の要請に行ったり、それから市内で署名運動をやったりして、それで結局、新聞社なんかも、わりと大きく取り上げてくれてね。一時それが沙汰やみになって、札幌市立第二高校になることになった。我々もほっとしたんですよ。ところが、今度はアメリカ軍の何とかいう将校がそれを強引にまた蒸し返して、とにかく新制中学に変えろと、ほとんど命令みたいな強制に出て、結局私たちの中学校は1年後に新制中学校に変えられてしまった。それでね、私の同級生は5年生の、最後の一年間は近い（札幌）西高校に行ったんです。私は旧制中学4年修了で北大予科に入ったので、新制高校には入らなかった。」

4 北大時代

中野「中学の後に入った北大の予科も、48年に入ってから1年でなくなって、

我々は新制の第1期に切り替えられたんです」

今西「最初は理論物理をやろうと考えておられたとか？」

中野「ええ。最初は物理や数学が好きで得意だったので、そっちの方に行こうと思っていたんで、理類に入ったんですけど、予科ではね。でも入って間もなく、学生運動に…。その年の秋に全学連ができて…」

今西「授業料値上げ反対闘争」

中野「そうそう。北大予科では桜星会っていうのがあってね。機構はあんまり賛成じゃなかったけど。まあ授業料を一挙に3倍にするという…馬鹿げた提案でね。これはやっぱりとんでもないと」

今西「授業料も3倍にして、大学法も制定するという3倍の値上げの方が大きかった（笑）」

中野「我々は桜星会の総会でストライキを決めました。予科で初めてのストライキで。我々1年が頑張ったんじゃないですか？相当ね。2年3年はやっぱりまだ、古い体制があって、3年生の執行部もストには反対だったが、ストが可決された。値上げは撤回できなかったが、私たちは授業料不払いを申し合わせた。私は入学料も含めてこの不払いを4年の終わりまで忠実に続けましたが、卒業の時にもめた。事務では『入学料も払わない者を卒業させる訳にはいかない』と（笑）。結局、親父に怒られてまとめて4年分払わされました。」

中野「その前後にいろいろなところから目をつけられていて、共産党に入れとすすめられました。僕自身も入るつもりでいたもんだから、それで間もなく入党しました」

佐々木「推薦者は誰なの？」

中野「推薦者は医学部の学生で僕の家近くに住んでいた人です。それは確か…6月の札幌神社のお祭りの日だったなあ。お祭り気分で（笑）入ったわけです。だから6月15日あたりだったですね、入党したのは」

今西「北大は敗戦の翌年の1月に民主主義科学者協会北大支部が結成されて、48年には北大の労働問題として公務員の年次末有給休暇闘争をやっています。学生運動では、桜星会が学生自治会に発展して、これが47年当初だと言われい

るんですけど…。で48年4月からは授業料3倍値上げ反対闘争，教育予算の増額・大学管理法反対闘争，教育闘争があつて，そこで北大の全学学生協議会が結成されたといわれます。48年9月が全学連の結成で，北大学連と札幌学連というのが結成されて，北大以外にも，室工大・小樽高商・札幌女子医専でこの年に学生自治会が結成されたと，梁田政方さんの『北大のイールズ闘争』（光陽出版社，2006年）に書いてありますね」

中野「まあ（運動の）全体的な動きにはそれほど関心もなかったし，関わってもしななかつたんですが，入って間もなく自分の思想のあり方というかそういうこととね，身近な家庭の中で自分が何をするかに関心があつて」

今西「しかしこの年はひどい食糧難で。配給米の遅配が北海道は日本一で，29日間配給米が遅配されるという」

中野「まあねえ。だから僕らの学生生活は…生協はそのちょっと前の47年にできてるんですけど，食堂でまともなものが食べられない。だから，学生の委員とか学生の理事が田舎へ行って，なんとかかんとか，ジャガイモとかカボチャとかダイコンなどを分けてもらつてきて。それでも足りないという，そういう時代でしたよね。学生もかなりが実家に帰つていてね。しばらくしてから帰ってくるという…」

今西「中央食堂で間もなく，海草でつくった麺を出した途端に行列ができて学生が並ぶという状態（笑）という，そういう食糧難ですね」

中野「いわゆる海ほう麺ですね。口に入れて喉を通ると溶けてしまう（笑）」

今西「でも石炭もなかったら，下手をしたら北海道では凍死してしまいますよね？」

中野「そうですね。石炭もまともにはない中でね。私のところでは，中学校の時も，予科に入ってから，生活の面では山羊を飼つて…毎年仔が生まれますからね。それで毎年乳を売つて…。それをまあ…学部の3年くらいまではやりましたね。それがひとつの収入源。親爺が敗戦の翌年帰ってきたけど，職業軍人だったから公職追放でまともな所に勤められない。それで知人を頼つて，戦後北海タイムスという新聞社がありましたけど，その前身の『新北海』という

新しい新聞社の守衛長にやっとなりました。体格がよくて、銃剣道ができて、元軍人だったので。そういう仕事で何とか食いつないで、それでも着るものもろくにないからね。それでアルバイトをして何とか食いつなくと。終戦の年の暮れには食べるものもなくてね。この年は豪雪の年でしたが、除雪をすると体力も消耗するでしょ？」

今西「栄養失調になられたそうですね」

中野「そう、朝起きると、ふわっと雲の上を歩くような感じで。…それから栄養失調になると握力がなくなるんです。いくら力を入れて握ろうとしても、力が入らない。『いやあ、これは新聞で言われている栄養失調だな』と思ってね。その日は無理しないでおこうと。ちょうどその日に小学校のクラス会があって、春近くでニシンがたくさん獲れて、それを持ってきてくれる人がいて、そのニシンを焼いて食べました、クラス会でね。そのニシンを食べると握力がたちまち戻った（笑）。すごいもんだと思った。多くの北海道人はニシンで助かったと思いますよ、本当に。あれがなかったら、もう…ね？」

今西「栄養失調とか結核とか、あの時は本当に流行ってましたからね」

中野「そうだよ。…そんな学生時代でしたねえ。」

5 共産党の活動とイールズ闘争

今西「それでイールズに入る前に、49年4月に高瀬文部大臣が北海道に来て、（高瀬大臣の）視察があって、49年7月の時に」

中野「そうですね」

今西「高瀬事件の時は直接関係は？」

中野「その頃も結局、共産党の組織というのは…党の問題でもあるわけですが、入党したんですけど、どこの班に所属してどうなったのか。基本的には学部ごとに、班組織ができるわけですが、ほとんどははっきり覚えてないくらい。学生会館が正門を入れてすぐ左に」

佐々木「今の本部の前ですよ」

中野「そこに木造の建物があって、下の1階に生協の事務室と購買、書籍、食

堂がありました」

佐々木「今は交流会館が建っているところ」

中野「そう。そこに奥まったところがあって、理髪店といくつかの部屋がありました。2階に広い部屋が…ダンスができるようになっていた。家内もやっていたことがあるようですけど。社研も（そこにあって）本来は勉強するところですが、実際は共産党の活動家のたまり場でした（笑）。その奥に北大新聞会があった。まあ、そういう構造になっていて。だから、そこへ行って顔を出せば、情報や指示が出たりという。まともにみんなで議論して方針を出すというような活動はたまにしかやっていなかった」

今西「細胞会議はやっていたのですか？」

中野「イールズ事件後に北大細胞が北大当局により公認を取り消されるまで、北大細胞は公認団体でした」

今西「昔はそうですね。自治会の選挙に出るのにも共産党の推薦でやってきましたから（笑）」

中野「それで公開細胞会議とって、農学部の教室を借りて議論したこともありました。おかしな話だけど（笑）。誰でも傍聴できるんです。でも、来たのはスパイ位かな（笑）」

今西「団体等規制令では、GHQにちゃんと党員名簿まで提出しているわけですから」

中野「ちょっと後なんだけどね、それは」

今西「49年ですね。団規令（団体等規制令）で」

中野「あのとき、僕が入った当時は、僕としてみれば、もっと自分の思想として、ちゃんと身につけたい。そのためにはマルクス・レーニン主義の勉強だとか、哲学の勉強とか、人生観に関わるような、生き方に確信の持てるものを身につけたいという思いが何よりも強くありました。それは、そういう場では議論するようなことじゃない。自分で考えて、身に付けるものでね。要するにパッと上からの指令が来たりするんですが、どこで決まったことなのか。結局、北海道委員会とか、札幌地区委員会の人々が時々来て、我々を呼び集めて、『今

はこういう情勢だ』と話す。それに対しては何の反対もできない状態だね。すると生来の反骨で、そういう状態に反発を感じましてね。あんまり社研の部屋には寄りたくない、自分でやることとしては社会科学の研究会をやるということで、『経済学批判』などを読んだり、もう少し上の学年になった時は、『資本論』研究会を原文でやろうということになって二年ほど続けました」

佐々木「学部はどこだったの？」

今西「文学部の、史学科に入られた。(卒論は)西洋史で書かれたんですね」

中野「1年生の予科終了までは理類にいて、授業も出ないで哲学だの社会科学だのに、のめりこんでいったので、そっちの方に進んでいこうと考えました。だから新制に切り替わる時に文科に移ったのです」

今西「文科へは割と移りやすかったんですね、文科の方が少なかったから。理科には徴兵猶予があったので、理科の方が多かった。だから、ポツダム文科という言い方もありますけど、理科から文科は入りやすかったんですね」

佐々木「北大はそもそも文科はできたばかりで。つくる過程でした」

今西「だから予科でも変われるんですか」

中野「それは自由でしたね。あまりうるさく言わないで、変わることができました」

今西「文学部は戦後でしたよね、できたのは？」

佐々木「農業経営学からですね」

中野「最初は法文学部で、法学と経済学と文が一緒だった(昭和22年)。その後で法経と文に別れて、最後に法と経が別れたんです。そういう時代で、僕が入った1948年の予科1年は、1年で予科が終わって、49年の前半の半年は何もなくて、49年の秋から新制大学の第1期がはじまったんです」

佐々木「法文学部の2年生？」

中野「49年の秋には新製の教養科の1年生、それは半年しかやらなくて、翌春に我々は2年生になりました、教養科のね。学制の転換の時期だね」

今西「49年から文学部の史学科に？」

中野「いえ。(50年の)イールズ事件の時は、教養の2年生でした」

今西「51年に文学部の史学科に行かれるわけですね？史学科は当時、堀米庸三さんが教授で、鳥山成人さんが助教授？」

中野「僕が入った時は堀米さんも助教授でした。西洋史学には教授はまだいなかった。教授は東洋史に板野長八さんという大家がおりました」

今西「堀米さんは、伝説では、北大時代にマルク・ブロックの『封建社会』を原著で読んでいたというんですが、本当ですか？」

中野「どうかなあ。僕らは中世史はねえ。マルク・ブロックの名はよく聞きました。近代史ということですね…」

中野「結局私も西洋史の、鳥山さんのゼミなんですね」

今西「50年にいわゆるイールズの事件があるんですね」

中野「そうですね」

今西「先生は二日間とも出ておられたんですか？イールズが来た時は」

中野「ええ、私も出てましてね。あれも、イールズを迎え撃つのにどういう体勢でやるべきかって、本来みんなが集まって、細胞でも集まって、議論すべきなんですが、そういう議論って、ほとんどした覚えがない。だから…何て言うかな。結局は細胞の指導部と、任命された役職を持つ人たちが集まって方針を立てたようです。結局、我々は動員の対象みたいなものでね。しかし、ともかくイールズの反共演説を粉碎しなくてはならないということはね、我々も、何も議論しなくても、わかることだから、それは文句なしに皆結束しました」

今西「それで、梁田政方さんのご本『北大のイールズ闘争』によれば、イールズが来る前に北大の学長が呼び出されて、その…『杉之原舜一さんの首を切れ』というように、文部省から言われたと…。まあ東大も『出隆さんを切れ』と言われたんだけど、南原繁さんは訳のわからないことを言って、誤魔化して逃げたと（笑）。北大の方は生真面目であんまりうまい解答はできなかったみたいな話を書いているんですけどね」

中野「まあ、大体そうなんでしょうね。事件のあとに出た伊藤誠哉学長の『学長告示』では、そもそも北大当局がイールズが北大でも講演する計画があることを知ったのは、イールズの講演日程に北大が組み込まれている知った後だ、

と記されています」

今西「杉之原さんをかなり狙いうちにするという…」

中野「杉之原さんは、法文学部ができた時に迎えられたんですが…。色々議論もあったようですけどね。民法の分野の、借地借家法の権威ということで、彼を迎えることになったといわれています。農学部の太田嘉四夫さん、それと工学部の…」

佐々木「栃内さん？」

中野「工学部職員の栃内さんなどもふくめて、48年11月、一緒に共産党の入党声明をしたようです」

今西「でも、杉之原さんは戦前からの活動家ですからね」

中野「そうなのですが」

今西「彼は確か戦前に治安維持法違反で捕まっていますよね。」

中野「ええ。ですが彼はしかし、一時は権力に屈服したという気持ちを持っていて、それを何とか取り戻したいという強い意志があったようですね。

河上肇は『自叙伝』で杉之原さんの獄中での態度を批判的に取り扱っていますが、これについては杉之原さんが1991年に出版した『波瀾萬丈——弁護士の回想』（日本評論社）で反論していることを、付け加えておきます。ともあれそういう形で文部省は、1949年から北大では太田さんと杉之原さんを一番に狙ったようです。それは別の所にも証人がいます。」

今西「狙いうちですよ」

中野「ええ」

今西「レッド・パージ反対闘争というわけですよ。それをイールズが来てね、ダメ押しをしようとしたんだけど失敗したという…簡単に言えばね。彼の演説なんかは全然説得力がないですから。やってもね」

中野「はい」

今西「北大は…この前の集会の話を知っていると、東北大とちがって、学生が教壇占拠なんて行動を取らないように司会者の松浦一理学部長が配慮して、二日目は中止ということ宣言して、その後に学生が壇上に上がったというわけ

ですよね。だけど、処分者を出したわけですよね？梁田さんもその一人ですけど、退学者になっているわけですよね」

中野「それはCIE局長のニュージェントが事件後相当強烈に、文部省を通じて『処分せよ』という強い圧力をかけていたことが、判っています。だから、事件の直後に調査委員会が組織されて、農学部の長尾教授が委員長になって、ほんの一月くらいで事情聴取やらその他調査を終えて、6月22日に処分が発表されるわけです（北大当局が事件の経過と処分理由を『学長告』として発表したのは6月30日）。それはそういう当時の文部省と占領軍の意向に応えたわけですよ。その代わりに教職員からは首切りは出せなかった、結局は」

今西「梁田さんは戻らなかったわけですよね？結局、共産党政治委員になってしまったわけですから。高岡健次郎さんや志村さんや本間さんは戻ったんですか？」

中野「いや、あの…秋まではですね、大体は顔を出していたと思うんですが。それから、そういう人たちもぱたっと姿を見せなくなって、その時は既に共産党の分裂は進んでいてね」

今西「50年6月ですからね。1月にもう、コミンフォルムの日本共産党の平和革命批判が出ていますからね」

中野「コミンフォルム批判はもう、1月には出ていて、その間にも、分裂は進行していました。北大…北海道はいわゆる主流派の」

今西「拠点でしたね」

中野「拠点になっていた」

今西「全学連中央は国際派で、北大は所感派だった」

中野「党組織もね、北海道の組織は完全にいわゆる主流派（元所感派）」

佐々木「吉田四郎とか」

中野「東京から、中央から派遣幹部が来て、それで統括するという方式が取られた。まあ所感派というか主流派の幹部が派遣されてきて、締めつける…」

今西「徳田球一派の吉田四郎さんとかですね？」

中野「吉田四郎が来て、学生の間ではほとんど神格化されていました。吉田四

郎はどもる癖があって、それでどもりが一時学生の細胞で流行しました(笑)」

今西「吃音の雄弁家はいますからね」

中野「そういう中でね、軍事方針がやがて具体化されていくことになって、処分された学生の一部や、その周辺の学生の一部は姿を消していきます。したがって、イールズ声明と不当処分に対する北大の反対運動はそのような中では、教養なんか一番頑張った方だけけれども、消滅に向かってしまうということになるわけです。そのあたりの大衆運動無視というか、そういう姿勢がすでにあるわけでしょうね」

佐々木「高岡さんの復学はそれとはちがう？」

中野「彼の復学は、ずーっと後6全協後です。」

佐々木「後なんだ」

中野「それまでは北海道内からさらに九州とか色々なところに行っていたようです。50年はそういうことで、僕らは夏休みはストックホルム・アピールの署名を集める活動で、炭鉱やあちこちに入りました。朝鮮戦争で原爆を使いそうだということで、原水爆禁止の署名をやったのです」

今西「原爆展もやったんですね？」

中野「原爆展もやって、私もそれには力を入れました」

佐々木「主流派の指導の下に、そういうことをやるの？」

今西「原爆展は主流派もやりますよ。というより京大では主流派が原爆展をやっています」

中野「あの、丸木俊子さんね、当時は赤松俊子さんだけど、あの人は旭川の手前の深川の近くの秩父別という農村の、お寺の娘です。今はこのお寺にも丸木夫妻の記念館があります」

今西「丸木記念館ですね」

中野「北大のイールズ闘争には、大きな特徴が三つあります。

ひとつは、学生の全学(自治会)協議会、職員組合、民主主義科学者協会札幌支部の三団体が、事前に実行委員会をつくってイールズ迎撃作戦を共同で検討したことです。

第2に、そこでは民科札幌支部長だった松浦一理学部長の提案にもとづき、北大では大学らしい理性的なたたかいをやろうということ、つまり『イールズ講演の内容がいかにインチキであるかを世に訴えることこそたたかいの正道である』という立場に立ち、イールズ講演を全教官・全学生に公開させること、その場での理論闘争で彼をへこませてしまうという方針で三団体が基本的に一致したこと、です。

それで第3に、これら三団体は前年から『北大を守る会』を結成してレッド・ページ問題を含めてゆるやかな統一戦線を結成しており、そしてこの力が大学当局によるイールズ講演会のあり方にも影響を与え、松浦さんが講演会の司会者となったことに示されるような、先導力を保持していたこと、でした。全学生が講演会に参加できる、その上質問も出来るという体制が取れたのは、イールズ講演が行われた30大学中、他にはどこにもありません。

この講演会は、5月15日の教官によるイールズ批判でまず成功を収めました。翌16日には、前日に鼻をへし折られたイールズが、集会途中で一方的に講演を始めたため、質問を要求する学生実行委員との間で混乱が生じました。結局それでこの講演会は中止となり、イールズの意図に打撃を与えたことは確かですが、私が考えることは、戦術の選択として、イールズも午後の講演のあとには、学生に1時間の質問を認めることを松浦さんに約束せざるをえなかったのですから、北大のたたかいとしては、この学生の質問時間をフルに活用して、学生の立場からイールズ講演の不当性と反憲法的性格等々を徹底的に追及し、天下に明らかにする質問戦の可能性を活用すべきであったのではないかと、思う点です。これが出来なかったことが、学生の処分を当局に許し、また以後の三者の統一戦線の発展に困難を生ぜしめた一因でなかったか。

もうひとつは、イールズ講演でめざした大学のレッド・ページが思うように進みそうもないのに焦った占領軍当局と吉田政府が、50年9月1日の閣議で政令62号による大学教員はじめ全教員の『赤追放』の方針を決定したという教育のレ・パ闘争の天王山ともいえる時点での対応の問題です。

全学連中執はこの日、帰省中の全学生諸君は、直ちに各学校へ帰れ、という

アピールを発し、9月から10月にかけてこれに呼応した主に首都圏の各大学、特に東大、早大、法政大の学生諸君は、大量の不当処分と逮捕者を出しながらも、強烈なレ・パ闘争を展開しました。そしてこの闘争が、大学の赤追放を基本的に阻止した第一の力でありました。

しかしこの重大な時点（9月26日）にあたり、北海道学連は関西学連と共に『全学連中央の悪質分子を追放せよ！』という声明を出し、共同闘争を放棄するという対応に出るのですが、これはどういう「理由」によっても弁護できない誤りであった、と考えざるをえません。

そしてこの背景にあったものが、当時の日本共産党の分裂、「主流派」の「臨中指導部」による全学連中執への一連の不当な攻撃であり、これらの誤りは、60年後の今日ではつとに明白であると思われるので、双方の学連関係者のフランクな話し合いによる共同の研究・解明が今求められている、と私は考えます。なお北大のイールズ闘争と、昨年の北大集会については、集会の報告集『蒼空に梢つらねて』（柏艚舎、2011年2月）をぜひご参照下さい（お問い合わせは編集委員 藤倉仁郎さん、011-219-7345、あるいは事務局長 手島繁一さん、011-728-4811にお願いします）」

6 逮捕・裁判・白鳥事件

今西「翌年の52年が白鳥事件ですよね」

中野「そうですね。その前に、私の身の上で大事なのはね、51年の春ですけど、私と他に二人が北大学生細胞の指導部から呼び出されて…」

今西「例のビラまき事件ですね。」

中野「ええ。北大の近くの北10条交番にビラを配れという指令でね。交番に行つて、わざわざ捕まりに行くようなものだけど」

中野「まあ『なぜ』というのは、後で追求したんだけど、僕は当時党の方針にかなりいろいろな疑問を持っていて、軍事方針についてはまだ全面的に展開したわけではないけれど、とにかく一般の民衆から党はますます離れていく。まだ火炎瓶を投げるところまで行ってなかったけれどね。52年以前ですから。そ

のうちに51年にスターリンに押しつけられたという、いわゆる新綱領の草案が出てきて、その討論をやったのはよく覚えているんですけど、疑問を持っている者は意見を出していいということだったので、それで私は軍事方針に強い疑問の意見を出したんです。

北大の中では私一人だけだったらしくて、後で吉田四郎が『新綱領に反対したのは全国で5人だけだ。北海道でただ一人意見を出したのは、大したものだ』とか何とか言っていたと聞いています。『大衆運動から離れて、独善的な運動を展開して、運動にとっても共産党にとっても損害・損失以外のなにものでもない。こういう方針は疑問だ』という主旨の意見書を一晩かかって書いて出したんです」

中野「そういうことが背景にあって、とにかく色々な点で疑問を出すもんだからね。『あいつは「プチブル」だ、自分の意見だけに固執してばかりいる。研究会なんかはやってるけれど、そういうことでひとつ…試練を与える必要がある』ということで、交番のピラまきに加えられた。そういうことは後の六全協当時の議論でね、当時の細胞委員だった者を追求したら、告白したから、ほぼ明らかです」

中野「この当時は、『プロレタリアートの指導性』という名分のもと、何でも『労働者はすばらしい』、『学生や知識層は労働者の中に入ってプチブル根性を徹底的にたたき直さなければ真の革命家になれない』なんていう単純なラブリーリズムの議論が学生細胞の中でも横行していて、威勢のいい意見にサッと従うのが、プロレタリア的、と見なされていた時代でした。よく考えて、自分の意見を持ち、それにこだわることは何か恥ずかしいこと、インテリ原罪のように思われてさえいました。ある会議で僕が、こういう風潮に反撥して、『プチブル性、といわれているもののなかにも、よいもの、積極的なものがあると思う。』と発言したら、『プチブル性によい面と悪い面があるなんてとんでもない!』と反論されて終わりとなった。この頃、僕の妹（中国文学者の中野美代子）は札幌西高の細胞に属していましたが、指導部から北大受験をやめて地域生協に入れ、といわれて相談に来たので、『とんでもない!断れ』といったら、やが

て高校細胞から北大細胞に『兄貴がマイナスの指導をしている』という連絡が入ったと聞きました。それはさすがに激怒して妹を励まし拒否させたこともありました」

中野「そういうことで、残る二人はね。…一人は捕まる名人で小島君、もう一人は松井君。三人がビラまきをやらされたんです。しょうがないから早く帰ってこなくちゃならんと思っていたら、そしたら、捕まる名人がね…」

中野「とにかく向こう（交番）も吃驚して、交番も一人しかいなくて、いや、二人だな、交番にいたのは。向こうもいきなり私たちを捕まえるわけにはいかないんだけど、捕まる名人が蕩々と話を続けて止まらないわけ。『なんで平和運動を弾圧するのか』と、警官に色々言って説得して。そのうちに『私はアルバイトがありますから』と言って松井君が帰ったので、彼は助かりました（笑）」

今西「要領がいいですね、それは（笑）」

中野「要領がいいとかごく自然に帰った（笑）。あとで（取り調べの刑事や検察官が）『アイツは誰か？』って僕等をしつこく追求するわけだけど、こちらはもちろん黙秘」

中野「二人になったあとで、警官が『あんた方もそろそろ帰った方がいいんじゃないか』言ったんです（笑）」

今西「警察の方も吃驚したでしょうからね。平和運動を弾圧するなというビラを学生が持ってきて、蕩々と演説するわけですから（笑）」

中野「ところがそのうちに、どういうてだてでか、中央署に連絡が行ったらしく、交番の外に出た途端にトラックで警官隊が来てね、我々は現行犯逮捕。それが…」

今西「それが地方公務員法違反の全国第一号だという」

中野「その前に（実は）2回くらい捕まっているんですけどね。それは団体等規制令でね、届け出た代表者の名簿に…僕自身もこれは犯罪的なと思いますが、北大の学生の細胞の代表者として、私にはまったく相談もなく、私（の名前）を出していたんですよ。他に2、3名。捕まる名人もそうだった」

中野「それで『日本共産党北大細胞』という名でビラを出すと、正規の団体等

規制令で届けているわけだから、逮捕に来るわけで。太田嘉四夫さんもその一人だね。一緒に捕まったんだけど、その時は起訴されなかった。でも、今度は立派な現行犯ですからね、しかも立派な証拠物件までわざわざ持参してきているわけだから（笑）」

今西「警察にビラをね（笑）」

中野「『平和運動を弾圧するな』そして『そういう指令が来た場合には巧みにサボれ』とある（笑）。これは公務員に対する怠業的行為の教唆煽動にあたるという理由で捕まった訳です」

今西「ああ、怠業的行為を奨めるということですか（笑）」

中野「その時までは北大生はみんな釈放か、起訴猶予されてたんですけどね、大したことないということで、張りビラやデモで市条例違反ならね。でも、今度はレッキとした公務員法違反ということで、絶好の機会ということで、我々二人は3週間くらい拘置されたのち、起訴されたわけです。それが北大生がこういう事件で起訴された戦後最初のケースだった。やがて保釈になって出てきて、その時に、文学部の史学科に移ったわけです。本当は経済でもどこでも行けたのですが、私も経済を志望していたんだけど、経済が（志望者数が）一番多くて、定員からはみ出るということで、（私は）皆と定員拡大の運動をして10名ほど拡がったのですが、それまでに単位もロクにとってないので、結局落とされちゃいました。結果として経済にいけなくてよかったんですが（笑）」

今西「そうですね」

中野「そしたら友人達が色々と心配してその一人が『歴史に来なさい』、『人数が少ないから可愛がってくれるよ』と。それで史学科に希望を出して、拘置所から戻ってきた時には文学部に移行していました。4月に。逮捕や何やらがおこったのは3月でしたから…」

今西「でも堀米さんと鳥山さんは休学扱いにしてくれたんですよね？」

中野「いや、それは裁判の最終的な時点です。」

今西「大学院入学の時？」

中野「ええ」

今西「弁護士は杉之原さんに？」

中野「そう杉之原弁護士に頼んで」

今西「でも、上告したんですよね。杉之原さんは」

中野「それは一審では懲役1年に執行猶予3年がついてたんですが、控訴審の段階で執行猶予が外されて（笑）。検事側が控訴したんです。刑訴法には不利益変更禁止の原則というのがあって、一審より二審がもっと重い刑にはならないんだけど、検事側が控訴すればそれが破られる。もっと悪くなることもある。…刑事訴訟法も当時、一生懸命勉強したんだからね（笑）」

中野「検事の控訴状曰く『被告人たちは毫も改悛の情がなく』とね（笑）。事実の上では証拠物件まで持っていつているから争えないので、公判では世界情勢から説きおこして平和運動を弾圧する命令を拒否することが警官の義務だ、と反論したんです。それで『執行猶予は量刑不当に軽い』ということにされて。結局、高裁で刑期は半年になったけど執行猶予が取られちゃった」

今西「でも、ビラを持って行っただけで実刑半年はきついですよ（笑）」

中野「今だったら考えられないけど、当時は人権の意識が希薄だったんだろうけど。また、こういう対警工作への見せしめの意味もあったんだろう、と思います。結局、逮捕の半年後に上告して、最高裁では1年半くらいずっとね、何も来なかった。卒業後まもなく、待ってたように上告棄却の知らせが来たんです」

今西「それで懲役ということになったんですか」

中野「葉書一枚で。これも徴兵と似ていますね。田中耕太郎の名前で。この名は生涯忘れません（笑）。文学部に在学中の2年間はこうして裁判中。しかも上告ではまず執行猶予がつくなんてなりっこないわけだから、棄却にほとんど決まってる。でも、それがいつ来るかはわからない。今日帰ったら葉書が来ていてすぐ収監かもしれない。あまり気持ちがいいものじゃない。特に親は…父親はね、軍人だったのにね、思想的には全く違うところに息子が入ったと嘆き悲しむわけです。爺さん婆さんも含めてね。そういう親たちの苦しみみたいなものがむしろ一番こたえました。自分は自らの思想を守ることには自信があっ

たけれど、そういう点では実にやりきれない部分もあったんですね」

今西「でも、お父さんは裁判所に嘆願書を出してくれたんですよね？」

中野「ええ。「それにしてもビラを渡しただけで実刑はおかしい」と」

今西「交番壊したわけじゃない(笑)。ビラを配っただけですからね」

中野「『主張はけしからんと言ったって、もし法を守るのが警官ならば、警官としては、あなたのやっていることは違法行為だ。すぐに帰りなさい、と説諭するのが当然のことではないか。違法行為をさせておいて捕まえたりするのは、思想のこととは別にけしからんと思うので』と。陳情を書いて送ってくれたり、色々としてくれた。親としては当然なのでしょうけど、やっぱり親だと感動しました」

今西「杉之原さんはその時弁護士になっているんですよね？」

中野「ええ、弁護士です、こういう事件を扱う札幌で当時はただ一人の。」

今西「彼の自伝を読むと、レッド・ページというのは具体的にはなかったけれど、イールズ以降はね。ただ、北大にだんだんいずらくなって、辞表を書かざるを得ない立場に追い込まれたと。梅本克己さんのように馘首になったわけではないけれど、レッド・ページの一例ではないかと書いてるんですよね。だから、実際にレッド・ページの被害者とはどのくらいの数なのか、よくわからないところがあって…。梅本克己さんとか小松撰郎さんみたいに馘首になったケースは歴然としているんですけど、いずらい雰囲気になって辞表を出したというのは、それも一つのレッド・ページですよ」

佐々木「ただ、彼は衆議院か何かに…」

中野「ええ。その後、彼の場合は弁護士をやりながら、いろいろと立候補させられます、最初は50年6月の参議院選挙、その後は札幌市長選挙など。もちろん当選はしないけどね。弁護士をやりながらです。こういうことが出来るのはだいたい弁護士でしょ？しかし私は、杉之原さんはこんなふうを使うのではなく、法学部教授としてがんばってもらう方がはるかに貢献してもらえた、と思います」

今西「彼の場合は弁護士という手段があるから食えますからね。梅本さんとか

小松さんなどは極貧の生活ですからね」

中野「そうですね。神戸大学でしたかね？」

今西「ええ、小松さんは神戸大です」

中野「その間に、文学部に入ったんだけど、文学部には自治会がないので、自治会を作ろうと半年がかりで色々アピールして、また党に仲間を、引きいれながらね。半年後に自治会を創設して、僕が初代委員長になって、3人の友人が執行委員になった。その1人がのちに北海学園大学の教授となった橋本剛君、1人が炭労の書記から共産党の道の常任になった河野正治君です。自治会としては面白い、いろいろなことをやりましたね。文学部自治会と教授会の間に連絡協議会というのをつくって、お互いに委員を出して、ここに提案して合意すれば、必ず相手側の審議機関、僕らの相手の教授会の議題になる。向こうから出したものもこちらの議題になる。文学部は戦後できたもので、たとえばフランス文学科がないから作れという要求を出したり、学生のための設備とか窓口事務の改善とか、自治会主催の教官講演会とか、学部全体の運動会とか。それで自治会に、学生もかなり結集してくれるようになりました。ただ文学部は、出てくる学生が少ないんでね」

今西「授業には出ない（笑）」

中野「半分も出てこない。まして旧制の文学部なら、そうでしょう？」

今西「家で本を読んでいる方がいいと（笑）」

中野「ストライキをやるといっても半数なんかとっても無理でね。三分の一……いや、実員四分の一で成立するといいいという規約にして、教授会側から色々文句を言われましたがね（笑）。でも翌年の破防法闘争なんかでもそれでちゃんと始めてのストライキをやりました。文学部は出てくるのが少ないんだから、実員の半分もいたら立派なもんだと。それで押し通して問題にはならなかった。それからチャタレイ裁判についての自治会としての意見を出したり。それらと並行して資本論研究会、民主主義科学者協会の活動も学生会員としてやりました。こういう研究会や、自治会、ゼミナールそういうところで（活動）していたんです、社研の部屋にはあまり行かずに。」

今西「裏の軍事活動やなんかには全然タッチしてなかったのですか？」

中野「51年の半ば過ぎに」

今西「軍事綱領が出ます」

中野「その頃になると、私が働きかけて党に入れたという『同志』がたくさんいるんですが、でもその新しいメンバーの一部がなぜか急によそよそしくなりました。会議や研究会なんかにももちろん来ないし。実は裏の組織ができていて、それは新綱領の軍事方針に関係があると…」

今西「中核自衛隊という軍事組織ですよ」

中野「51年の秋くらいから始まって、結局それが白鳥事件につながってしまうわけですが。そういう部分が出てきて、細胞は何とも奇妙な二重組織の状態になる」

今西「51年秋に村上国治さんが共産党の札幌地区委員会の委員長になって軍事方針が強化されて、赤ランプ事件という、国鉄を止めて、列車から石炭を奪取する計画だとかが始まる」

中野「ええ」

今西「でも計画だけでほとんど成功していない（笑）」

中野「そういう色々なことがおこってきましたが、でも僕は合法的な自治会活動を中心にやろうと考えていました。51年秋にはほとんどの各学部にはほぼ自治会ができてましたが、北海道大学全学自治会連合中央委員会ができて、各学部自治会から中央委員を選出して、それが全学的な方針を調整し、策定し実施するという機関ができたんです。私の前の中央委員会の委員長には農学部自治会委員長の田辺良則さんが成りました。彼は海兵出身でした。この間亡くなったけれど。そして2期目の中央委員会の委員長には、51年の末に皆が『やれ』ということで文学部自治会委員長の私が中央委員長になったのです」

中野「全学自治会での活動というのが私の活動でした。その中で翌年（1952年）の破防法防止闘争などを戦ったのです。52年6月のこの闘争では、北大の法経・文・教養三学部がストを打ち、2000名規模のこれまで最大のデモを中央署に向けて決行しました」

今西「血のメーデー事件が起こって、それに対抗する形で破防法を出してきました」

中野「そうですね。そういう時期で。だけど、かた一方では白鳥事件が起こり…」

今西「この時は、だから北大の学生も山村工作隊とか、あちこちの農村に行ってますよね？ 52年の秋ぐらいには」

中野「そうですね。結局そういうのはね、我々のように合法の舞台でやっているものにはまったく知らされない。ポツといなくなるのでよくわからないんですが。誰がどうなったのか、『おそらくはこうだ』と我々は推測しているだけでした」

今西「51年の暮れにはもう…札幌市役所の座り込み、高田市長宅への投石事件とか。そういうことを起こしていますよね」

中野「それで正月過ぎの1月21日に白鳥事件が起きる」

佐々木「この家の近くですよ」

中野「南6条西17・18丁目あたり。この近くというので、だいぶ私も張られました。かなりショックだったね、やはりね」

今西「21日に射殺されて、23日朝に天誅ビラが出る。北大生がやったのではないかという話も随分言われた」

中野「北大生か自由労働者ね。この辺りが一番使いやすいと。…ちゃんとした職場の組織労働者は家族もあるし、無理はさせられない。自由労働者と学生は消耗品みたいに使われました。高校生までも含めて」

今西「50人くらい逮捕されているんですよね？」

中野「正確に数えたわけじゃないけど…追平君の本ではそういうふうになっています。それについては、まだ厳密にはたしかめていない」

今西「追平さんの本は、反党分子と言うことで、一時はものすごく、信じてはいけない本だと（笑）。共産党は村上国治さんは無罪だとずっと運動していたのに。だから追平氏の本はけしからん、という扱いになっていた」

中野「彼はひっくり返ってね（転向者の意）。我々に対しては昔は、極めて高

圧的な指導をやっていたのに、追平はね。でも、つかまったらすぐ転向した」

今西「彼は『佐藤博主犯説』を唱えていますよね。先生も佐藤博さんだと思いにになりますか？中国に逃がすんですよね？」

中野「向こう（中国）で亡くなったんです。彼ともう一人宍戸さん。二人は英雄みたいな扱いを受けた。それから鶴田倫也君（当時北大生）ね。彼も帰ってこれなかった」

今西「鶴田さんは行ったきりですよ、まだ」

中野「そう」

今西「ご存命だと聞いておりますが、お元気なんでしょうね？」

中野「そうですね。彼の兄さんの鶴田晃三さんは弁護士になって東京にいますけど、何回も中国へ行ってね、比較的最近も本人と会ってきて、もう日本に帰ることはないという話になったそうです。向こうで結婚して、子どもたちも向こうで育っているわけですから」

今西「10名が中国に亡命し、うち5名が北大生で。10名のうち7名は帰国したんですけど、2名は死亡して、残る1名の鶴田さんがまだ中国に残っている状態ですね。それで精神病院に入られたり、自殺されたりした人もいますよね？北大生で」

中野「理学部の村手君ですね。彼は結局、心の障害を生じて公判も分離され、復学できなかったんです。無口な男でした。彼も大きな被害者というか、犠牲者でした」

中野「当時の党の北海道委員であった川口孝夫さんの『流されて蜀の国へ』（自費出版）には重要な証言があります」

今西「文化大革命を経験して帰ってきたという」

中野「自分も軍事部門の委員であったけれども、事件のことは何も知らされていなかったが、後で聞いた実際の話は、だいたいは言われているところの高安知彦君の証言と同じであったと書いています。僕自身も、起こった直後から、そうであろうと、それしかありえない、と思っていました」

中野「以下のことは、これまでほとんど誰にも云えなかったし、今回はじめて

記録に残る形で語るのですが、翌日に呼び出されて、文学部の自治会の部屋に行ってみると、そこにいたのは法経学部の自治会委員長をやった大谷高一君でした。彼は裏の方面の組織にも関わっていた。その彼が黙って紙切れを見せたんです。そこには『白鳥事件は共産党のやったことではないという日和見主義的な意見を克服して、党の意思の革命的統一を図る必要がある』ということが書かれていた。そして他方その翌日の朝に市内共産党札幌地区委員会のビラには『見よ天誅遂に下る！』と、このテロ行為を全面的に擁護していたのです」

中野「高安君が印刷に関わったというビラです。で、彼が署名の主体を誰にするかと聞かれて、自分の判断で『札幌地区委員会』と入れたということらしい」

中野「私はとうとうここまでやったのか。起こりそうだったけど、ついにやったのかと、暗然とした気持ちになりました。しかも、世の中では誰もほめる者はいない。囂々とした非難、テロ行為だという批難だけ」

中野「ところが翌日か翌々日にもう一度呼び出されて、大谷君にやはり黙って紙切れを見せられた。そこには『この事件は愛国者の行為ではあるが、共産党のやったことではないということに、合法的宣伝は統一する』とありました。これは事実を知らなかった道委員の村上由氏らが事件についてジャーナリズムに対応した弁明に同調したもののようです。2回とも、大谷君は私が質問しようとする、拒否してすぐ退室しました。」

今西「学生時代には『村上さんの無実を助けるために』とカンパした」

佐々木「やはり全国に『白鳥事件現地調査団』ができて、毎年お客さんが来るわけ。で私は案内役で、みんなを連れて行って『ここでやりました』をしなくちゃいけません。幌見峠に行って『ここが裁判で登場するあの事件の現場です』とね。そこで僕も『本当はありません』なんてことを言っていた。だから。やりきれない気はしていた。我々としては言えないわけですよ」

今西「辛いですよね」

前号「旧制水戸高・梅本克己・ハンガリー事件—大池文雄氏に聞く—正誤表

- 9頁22行目 『奴隷の言葉』→『奴隷の死』
- 10頁12行目 大東塾の遠山景久→(削除)遠山景久
- 12頁14行目 小宮山英機氏→小宮山英蔵
- 13頁8行目 製紙工場→製糸工場
- 同 14行目 製紙→製糸
- 37頁22行目 フラッグ→私党
- 40頁10行目 50円ぐらいの有料で→(削除)有料で
- 41頁2行目 高地さん→高知さん
- 同 3行目 全国の→合同の